

弥生時代九州における漢鏡の流入と小形仿製鏡の生産

南 健太郎

はじめに

弥生時代には中国や朝鮮半島から多くの文物が北部九州を中心とする地域に流入した。銅鏡もこの中の一つであり、まず朝鮮半島製の多鈕細文鏡が流入し、その後前漢から後漢にかけて製作された漢鏡が北部九州を中心にもたらされている。九州からは現在までのところ350面以上の漢鏡が出土している。これに加え弥生時代後期になると北部九州において前漢の異体字銘帯鏡を模倣した弥生時代小形仿製鏡（以下、小形仿製鏡と記す）の生産が開始され、漢鏡も破鏡としての流通がみられるようになる。小形仿製鏡は現在までのところ200面程度が出土しており、北部九州で製作された小形仿製鏡は朝鮮半島東南部でも出土している。

このように弥生時代には主に漢鏡、破鏡、小形仿製鏡という3種類の銅鏡が流通していたことになる。本論ではそれぞれの銅鏡の時期的・空間的な変遷を捉えることにより、中国から流入した漢鏡と北部九州で製作された小形仿製鏡がどのように流通していたのかを明らかにする。そして弥生時代九州における銅鏡の流通から漢鏡や小形仿製鏡のもった意義についての考察をおこないたいと思う。

1. 研究史と問題の所在

1.1. 研究史

弥生時代の銅鏡の研究は古くからおこなわれており、研究の蓄積も著しい。近年は岡村秀典によって精緻な漢鏡の分類・編年が構築され（岡村1984・1990・1993b）、前漢から後漢における銅鏡製作は7期に区分されている。岡村は中国・楽浪・北部九州の銅鏡出土量の変遷に矛盾がないこと（漢鏡3期の北部九州と漢鏡7期の近畿地方を除く）から、中国での製作から日本への流入までの時間的傾斜を与えない（岡村1993a・1995）。また各期における銅鏡の分布の検討から漢鏡流通の中心が漢鏡6期までの北部九州から漢鏡7期の近畿地方へと推移していることを指摘している（岡村1990）。これに対し寺沢薫は日本列島における弥生時代中期後半から後期の暦年代算出の手段として漢鏡をとりあげ、漢鏡の出土した時期から岡村の分類・編年を再検討した（寺沢2004）。寺沢の指摘による岡村分類・編年の再検討については後述する。完形の漢鏡に対して破鏡¹⁾の研究も近年盛んにおこなわれている。藤丸詔一郎は破鏡の出現と地域性について検討をおこなった（藤丸1993・2000）。藤丸は破鏡が佐賀県二塚山遺跡76号甕棺出土鏡のような故意に破砕された例などと関係して生み出されたものであるとし、地域によって墳墓への副葬と住居跡等への廃棄の割合が異なることを指摘している。また辻田淳一郎は弥生時代後期から古墳時代前期における破鏡の穿孔事例の検討をおこない、破鏡に施される穿孔には補修接合・懸垂・分離整形の三種類が存在したことを明らかにし、破鏡の初現を弥生時代後期後半とした（辻田2005）。弥生時代後期後半から古墳時代前期における出土状況の変化の

原因は、北部九州を起点とした弥生時代後期以来の破鏡使用形態の上に、近畿地方をセンターとする完形中国鏡分配システムが重層的に成立したことにあったとした。また破鏡の流通に関しては威信財としての流通と考えるのは困難であるとされた。

漢鏡を模倣して製作された小形仿製鏡の研究は高倉洋彰によって体系的におこなわれてきた。高倉は小形仿製鏡の分類・編年をおこない、製作地や流通の問題について言及した（高倉1972・1985・1993a）。小形仿製鏡の原鏡として前漢の異体字銘帯鏡（日光鏡）をあげ、初期のものは朝鮮半島で製作され、その後北部九州で製作がおこなわれたとした。また製作の契機については漢鏡流入の停滞による絶対数の不足とし、漢鏡の補充的な役割があったことを想定している。このような高倉の研究に対し田尻義了は高倉の分類・編年を再検討し、原鏡との関係、鏡の扱われ方、製作時における湯口の問題の検討により、初期の小形仿製鏡の製作地を日本列島であったとした。製作開始の要因については高倉の漢鏡の不足という理由に否定的である（田尻2003）。また鑄型の出土事例の検討や詳細な鏡群の抽出をおこない、これまで考えられてきた福岡県春日市須玖遺跡群における一元的な生産と配布ではなく、集約→分散→集約という生産体制の変化がみられ、流通に関しても鏡群ごとにまとまりがみられることから製品は各製作地から流通していたことを指摘した（田尻2004）。

また高倉や田崎博之はこれらの銅鏡の分布や各地域の出土状況から銅鏡の社会的意義についても言及している。高倉は鏡片副葬の出現を小形仿製鏡製作開始の要因と同様に漢鏡の不足によるものとし、鏡片や小形仿製鏡が各地域間相互の結合の象徴として存在したものとした。（高倉1976）。これに対して田崎は鏡の保有層は社会的に限定されており、北部九州の中心地域と周縁地域とでは鏡の保有層に社会的地位の差異がみられることを示した（田崎1984）。田崎は鏡片や小形仿製鏡の盛行を高倉が述べた漢鏡の不足（外的要因）によるものではなく、鏡保有者層の拡大に伴う需要の増加に求めている。

1.2. 問題の所在と分析方法

弥生時代の銅鏡研究においては、上述のように漢鏡、破鏡、小形仿製鏡それぞれについて製作、流通、社会的意義が述べられてきた。しかし破鏡は漢鏡の破片に二次加工を加えて再利用したものであり、小形仿製鏡は漢鏡をモデルにして製作されたものである。これまでの研究によって漢鏡（特に前漢鏡）に権威の象徴という性格が与えられていることから（高倉1993b）、漢鏡を破砕し再利用した破鏡や漢鏡を模倣した小形仿製鏡の生産や流通、社会的意義について言及するためには、これらの流通が相互にどのような関係にあり、各地域内においてどのような扱われ方をし、そこにどのような差異もしくは共通性がみられるのかを明らかにする必要がある。また田尻によって北部九州での小形仿製鏡製作が後期初頭に遡ることが示されたが、製作開始の要因については高倉の論考に否定的であるものの新たな解釈はおこなわれていない。小形仿製鏡製作開始の要因は小形仿製鏡の社会的意義を考える際に重要な位置を占める。漢鏡を模倣した小形仿製鏡の製作開始の要因に迫るためには原鏡となった漢鏡の流入・流通状況との関連性のなかから考察していく必要がある。

以上のことから本論では漢鏡と小形仿製鏡の流通状況の比較をおこない、それぞれの流通がどのような関連性を有していたのかを問題とする。分析の前提として漢鏡と小形仿製鏡の時期的併行関係を明らかにする。併行関係を検討する際はこれまでの研究により示されてきた漢鏡と小形仿製鏡の編年の再検討をおこなった上で、筆者なりの編年案を提示する。その後、漢鏡、破鏡、小形仿製鏡の分布傾向を時期別に示し各地域における銅鏡の流通状況について検討をおこない、弥生時代における銅鏡の流通とその意義について考察する。

2. 漢鏡と小形仿製鏡の併行関係

2.1. 小形仿製鏡の分類と編年

漢鏡と小形仿製鏡の併行関係を明示する前に小形仿製鏡の分類と編年をおこなう。小形仿製鏡の分類と編年は高倉や田尻によっておこなわれている。高倉は小形仿製鏡の分類にあたりまず内行花文を有するもの（以下、内行花文系と記す）と有さないもの（以下、重圏文系と記す）に分け、内行花文系を3型式6類に、有さないものを原鏡の違いによって7型式に分類した。そして内行花文系の各型式には分布に差異が認められ、型式差が分布の違いを示すと想定し、その製作地については第Ⅰ型が朝鮮半島南部、第Ⅱ型が福岡平野を主とする北部九州、第Ⅲ型が近畿ないしその周辺とした（高倉1972・1985）。田尻は高倉の型式分類を再検討し、文様構成に視点をおいて内行花文系を4型式6類に、重圏文系を3型式6類に分類した。型式変化の方向性として重圏文系については内区文様の省略化を想定している。製作時期については鋳型や甕棺出土の例を用いながらも基本的には高倉の年代観を踏襲しているようである。製作地については初期の段階から北部九州で製作されていたとしている。小形仿製鏡の成立に関して高倉は異体字銘帯鏡（内行花文系日光鏡や重圏文日光鏡）をあてるが、田尻は重圏文日光鏡と重圏文系のヒアタスが大ききことや重圏文日光鏡の出土数の少なさから内行花文日光鏡を模倣して内行花文系小形仿製鏡が創出され、内行花文帯が欠如し、重圏文系小形仿製鏡が成立したものとしている（田尻2003）⁽²⁾。

ここで高倉や田尻の成果を援用しながら、筆者の分類と編年を示す。分類基準としては田尻が示した製作工程のモデル（田尻2004：p.57）を認め、文様構成の変化に着目する。

内行花文系については（表1）原鏡と考えられる異体字銘帯鏡Ⅲ式⁽³⁾を忠実に模倣したものを最古型式と考える（図2）。Ⅰ型は内行花文帯の外側に配される櫛歯文帯の有無によって細分し、櫛歯文帯があるものをⅠ型A類、ないものをⅠ型B類とする。Ⅰ型A類は文様構成だけではなく、銘文も原鏡を忠実に模倣する。Ⅰ型A類の熊本県五丁中原遺跡出土鏡の銘帯には小型の異体字銘帯鏡Ⅲ式に通有の「而」や渦巻文の模倣がみられる。

内行花文系Ⅱ型（田尻分類の第2型に相当する）は内行花文帯を縁の内側に配するものである。Ⅱ型は縁幅によって二分し、狭縁のものをⅡ型A類、広縁のものをⅡ型B類とする。これらはⅠ型が狭縁で後出するⅢ型が広縁であることから、広縁のⅡ型B類のほうが時期的に新しいものと考えられる。またそれぞれ内行花文帯と櫛歯文帯の間に配される円圏の数が一本のものと二本のものが存在することから円圏が一本のものをa類、二本のものをb類とする⁽⁴⁾（図1）。

近年の出土量の増加に伴い内行花文帯を単線弧文で表すもの（慶尚南道良洞里遺跡162号墓）や浮彫の内行花文帯の内側に単線の内行花文を有するもの（佐賀県吉野ヶ里遺跡・熊本県小野崎遺跡）がみられるようになった。これらはⅡ型と複線弧文で内行花文帯を表出するⅢ型C類（田尻分類第3型に相当する）の過渡的段階を示す資料であり、単線の内行花文を有する点を重視しそれぞれⅢ型A類・B類とし、複線弧文で内行花文帯を表出するものをⅢ型C類とする。Ⅲ型C類もⅡ型と同様に内行花文帯と櫛歯文帯の間に配される円圏の数による細分が可能である。

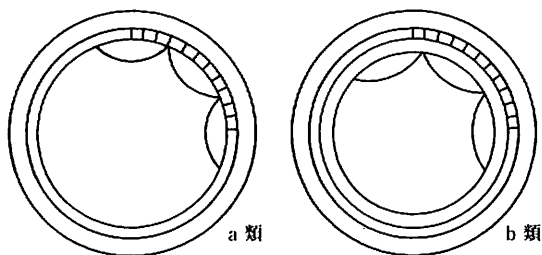


図1 内行花文系の細分

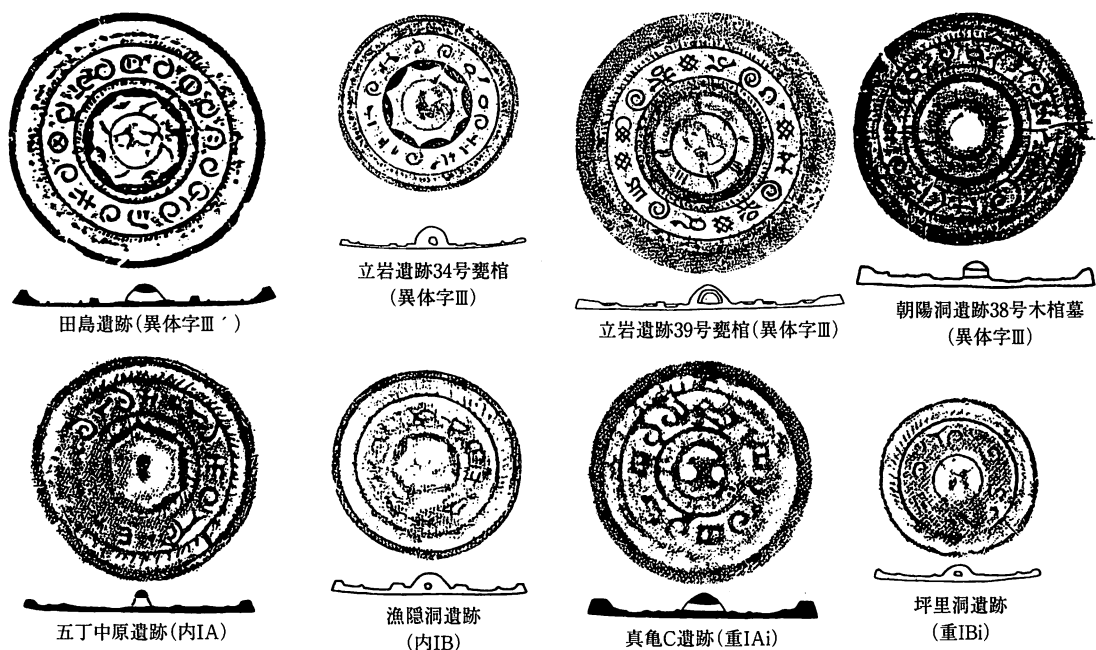


図2 小形仿製鏡と原鏡（内行花文系）

内行花文帯が鈕の周囲に配されるが、縁幅が広い一群をⅣ型（田尻分類第4型に相当する）とする。Ⅳ型には内行花文が浮き彫りのものと単線（複線）弧文のものがあ、浮き彫りのものをⅣ型A類、単線（複線）弧文のものをⅣ型B類とする。これらはⅡ型B類からⅢ型への変化と同様のものと考えられる。

重圏文系については（表2）内行花文系と同様に原鏡に近い一群を最古型式として分類をおこなっていく（図3）。まずⅠ型（田尻分類第1型に相当する）については原鏡の忠実な模倣を基準とし、異体字銘帯鏡の銘文を忠実に模倣したものから銘帯を省略していくものをⅠ型A類、銘文の模倣をおこなわず蕨手文を強調する一群をⅠ型B類とする。Ⅰ型A類は広島県真亀C遺跡出土鏡を基準とし熊本県（伝）菊地・阿蘇鏡から韓国慶尚北道舎羅里130号墓出土鏡へと銘帯を省略化していく。Ⅱ型（田尻分類第2型に相当する）は広縁のもので、銘帯を有し、銘文の模倣がおこなわれている。銘帯の文字はⅠ型A類と同様のものがみられる。

図3 小形仿製鏡と原鏡（重圏文系）

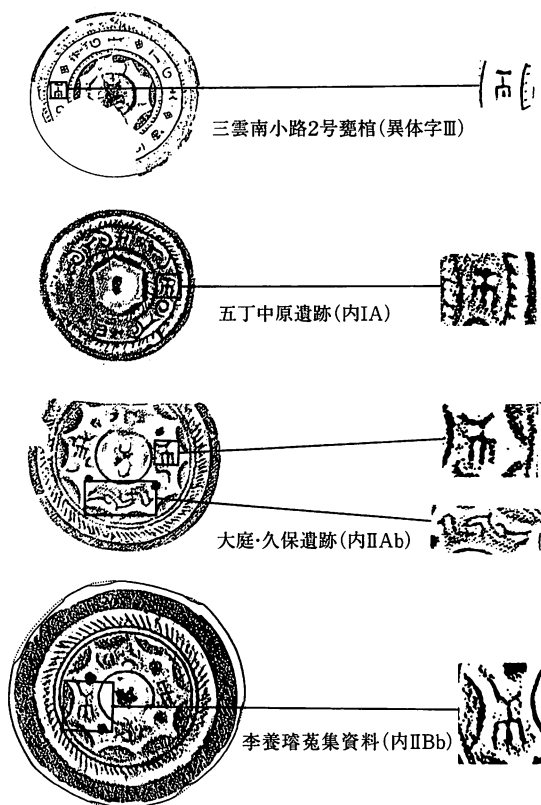


図4 銘文・文様の変遷

表1 内行花文系の分類

高倉分類	田尻分類	筆者分類	文 様 構 成
第Ⅰ型a類	第1型	I型A類	狭縁-櫛歯文帯-円圈-文様帯-円圈-櫛歯文帯-内行花文帯-鈕
		B類	狭縁-櫛歯文帯-円圈-文様帯-内行花文帯-鈕
b類	第2型a類	Ⅱ型A類a	狭縁-櫛歯文帯-円圈-内行花文帯-文様帯-円圈-鈕
		b	狭縁-櫛歯文帯-円圈-円圈-内行花文帯-文様帯-円圈-鈕
第Ⅱ型a類	b類	Ⅱ型B類a	平縁-櫛歯文帯-円圈-内行花文帯-文様帯-円圈-鈕
		b	平縁-櫛歯文帯-円圈-円圈-内行花文帯-文様帯-円圈-鈕
		Ⅲ型A類	平縁-櫛歯文帯-円圈-単線内行花文帯-円圈-鈕
		Ⅲ型B類	平縁-櫛歯文帯-円圈-浮彫内行花文帯-単線内行花文帯-円圈-鈕
b類	第3型a・b類	Ⅲ型C類a	平縁-櫛歯文帯-円圈-複線内行花文帯-円圈-鈕
		b	平縁-櫛歯文帯-円圈-円圈-複線内行花文帯-円圈-鈕
第Ⅱ'型	第4型	Ⅳ型A類	平縁-櫛歯文帯-文様帯-円圈-浮彫内行花文帯-鈕
		Ⅳ型B類	平縁-櫛歯文帯-文様帯-円圈-線刻内行花文帯-鈕

表2 重圏文系の分類

高倉分類	田尻分類	筆者分類	文 様 構 成
第Ⅰ型a類	第1型a類	I型A類i	狭縁-櫛歯文帯-円圈-文様帯-円圈-櫛歯文帯-円圈-鈕
	い類	ii	狭縁-櫛歯文帯-円圈-円圈-櫛歯文帯-円圈-鈕
b類	う類	iii	狭縁-櫛歯文帯-円圈-櫛歯文帯-円圈-鈕
	え類	B類i	狭縁-櫛歯文帯-円圈-文様帯-円圈-櫛歯文帯-鈕
		ii	狭縁-櫛歯文帯-円圈-文様帯-円圈-鈕
第Ⅱ型	第2型	Ⅱ型	平縁-櫛歯文帯-円圈-文様帯-円圈-鈕

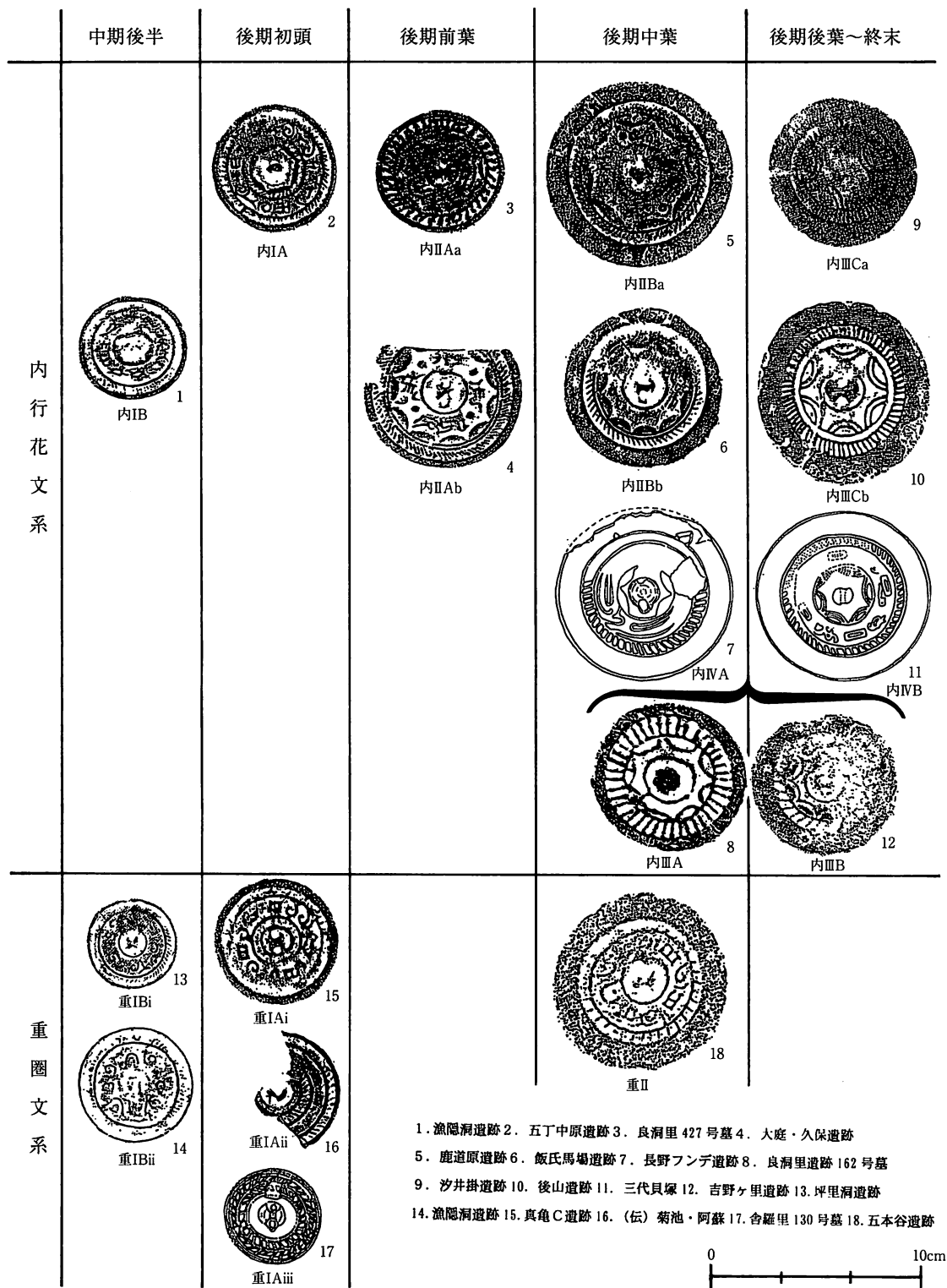
次に編年をおこなう。内行花文系は原鏡の忠実な模倣をおこなったⅠ型A類から狭縁で内行花文帯を縁の内側に配する内行花文帯Ⅱ型A類へ変化したものと考えられる。Ⅰ型B類は文様構成がⅠ型A類に類似するものの銘文の模倣が確実にはおこなわれていない。Ⅰ型A類のような銘文の模倣はⅡ型A類・B類にもみられ(図4)、Ⅰ型B類とは異なる。Ⅱ型A類とⅡ型B類の前後関係は上述の通りである。またⅡ型B類からⅢ型C類への変化はⅢ型A類・B類を経ておこなわれたものであろう。Ⅳ型についてはすでに広縁化している点でⅡ型B類と同時期の所産であることが考えられ、内行花文帯の表出方法も浮き彫りから複線弧文へと変化することはⅡ型B類からⅢ型C類への変化と対応している。

重圏文系の編年については既に述べたようにⅠ型A類とB類の間に銘帯の模倣の方向性の違いがみられる。これは内行花文系Ⅰ型A類とB類の相違点でもある。広縁化したⅡ型は未だ銘帯を有している点からⅠ型A類との関連性がみられる。Ⅰ型B類における蕨手文のみの模倣は後出する重圏文系小形仿製鏡にはみられない。以上のことをまとめると図5のようになる。

2.2. 小形仿製鏡の製作地と製作時期

前節において小形仿製鏡を分類しそれぞれの前後関係を明らかにした。ここで小形仿製鏡の製作地と製作時期について考えてみよう。

製作地と製作時期でまず問題となるのは内行花文系・重圏文系Ⅰ型であろう。Ⅰ型については鋳型の出土例がないため、製作地や製作時期は製品からのアプローチをおこなうしかない。製作地に関しては上述のように朝鮮半島南部説と北部九州説があるが、筆者はその両方で製作がおこなわれていたものと考えている。具体的には内行花文系Ⅰ型B類および重圏文系Ⅰ型B類を朝鮮半島南部製、内行



1. 漁陽洞遺跡 2. 五丁中原遺跡 3. 良洞里 427 号墓 4. 大庭・久保遺跡
 5. 鹿道原遺跡 6. 飯氏馬場遺跡 7. 長野フンデ遺跡 8. 良洞里遺跡 162 号墓
 9. 汐井掛遺跡 10. 後山遺跡 11. 三代貝塚 12. 吉野ヶ里遺跡 13. 坪里洞遺跡
 14. 漁陽洞遺跡 15. 真亀 C 遺跡 16. 〈伝〉菊池・阿蘇 17. 舎羅里 130 号墓 18. 五本谷遺跡

図 5 小形仿製鏡の編年

花文系Ⅰ型A類と重圏文系Ⅰ型A類を北部九州製とする。これは両者に漢鏡を模倣しようとする意識に差がある点、鈕孔製作技術が異なっている点（南2005）がみられ、内行花文系・重圏文系Ⅰ型B類の鈕孔製作技術については朝鮮半島に源流が求められることから、技術的にみてその製作地を朝鮮半島と北部九州にわけることができる^{〔5〕}と考える。現在のところ韓国慶尚北道漁隱洞遺跡や韓国慶尚南道坪里洞遺跡において異体字銘帯鏡Ⅲ式・虺龍文鏡ⅡA式との共伴例があり、少なくとも朝鮮半島南部において両者が存在している間に製作がおこなわれたものと考えられる。北部九州でも異体字銘帯鏡Ⅲ式の副葬直後の後期初頭にいち早く副葬される（福岡県有田遺跡S T002甕棺、二塚山遺跡46号甕棺）ことから朝鮮半島における製作がやや時期的に遡ると考えられる。また北部九州製と考えている重圏文系Ⅰ型A類Ⅲが出土した韓国慶尚北道舍羅里遺跡130号墓の年代観からも朝鮮半島製のほうが時期的にやや遡ると思われる。北部九州での製作は異体字銘帯鏡Ⅲ式流入後ということになるが、銘文等の忠実な模倣からⅢ式やⅣ式が副葬される前または副葬された直後であったと考えてよいであろう。しかし初期の北部九州製品の製作時期の検討はそれ自体からおこなうことができない。そこで先に内行花文系Ⅱ型などの製作時期を明らかにし、そこからⅠ型の製作時期を考えることとする。

内行花文系Ⅱ型A類については長崎県赤崎遺跡における高三瀧式に復元される土器との共伴から後期前半に位置づけることに問題はない。また韓国慶尚南道良洞里遺跡427号墓において内行花文系Ⅱ型A類と共伴した変形細形銅剣が長崎県シゲノダン遺跡で貨泉や中広形銅矛と共伴した銅剣に極めて類似することが指摘されており（橋口2003）、Ⅱ型A類を後期初頭から前半に位置づけることができる。内行花文系Ⅱ型A類の銘帯に配される文字は内行花文系Ⅰ型A類のものと共通しており、両者とも縁が広縁化していないことから、製作時期にそれほどの時間的隔たりは感じられない。このことから北部九州における小形仿製鏡の製作開始時期を後期初頭と考えておきたい。

Ⅱ型B類は現在のところ出土時期が後期前半まで遡る例は、藤丸が述べるように佐賀県礫石B鏡のみである（藤丸2003）。礫石B鏡は破壊された三津式の甕棺の上部から出土しており、確実に甕棺の副葬品であったかどうかは不明である。そこでⅡ型B類との間に縁幅や内行花文帯の表出方法において関連性があると考えられる内行花文系Ⅳ型A類について先に検討しよう。内行花文系Ⅳ型も土器などの確実な共伴例は少ないが、佐賀県松ノ内A遺跡では祭祀土壙から内行花文系Ⅳ型B類が出土しており、この時期は祭祀土壙出土土器や周囲の墳墓の営まれた時期から後期前半から後期中頃と考えられている（細川1997）。内行花文系Ⅳ型A類と類似する福岡県井尻B鋳型が出土した住居跡からは後期中頃の土器が出土している（宮井1997）。井尻B鋳型は内行花文帯を鈕の周囲と縁の内側に配するもので、内行花文系Ⅱ型B類とⅣ型A類の特徴を有している。このことから後期中頃には内行花文系Ⅱ型B類とⅣ型A類が存在したのと考えられる。内行花文系Ⅱ型B類の文様帯には銘文を配するものがあり、銘文の中の「而」は内行花文系Ⅰ型A類やⅡ型B類と同様にそれほど原鏡から逸脱しておらず、Ⅱ型A類からの緩やかな変化であったと考えられる（図4）。このように内行花文系Ⅱ型B類には後期前半まで遡る資料はないが内行花文系Ⅳ型や内行花文系Ⅱ型A類との関係から後期中頃の時期を与えることができる。このように考えると内行花文系Ⅳ型A類が出土した佐賀県二塚山遺跡17号土壙墓は大型の足元掘り込み土壙墓で、重圏文系Ⅱ型が出土した佐賀県五本谷遺跡25号土壙墓もこれと同型式であるため、重圏文系Ⅱ型も後期中頃と考えてよからう。

北部九州における製作地については鋳型の出土が重要になる。内行花文系・重圏文系Ⅰ型A類とⅡ型A類は製作地を特定し難いが^{〔6〕}、異体字銘帯鏡の忠実な模倣をおこなっている点と他の青銅器の

鋳型が集中するという点から考えて須玖遺跡群での製作であったことが考えられる。内行花文系Ⅱ型B類は福岡県須玖坂本遺跡で鋳型が出土しているため須玖遺跡群での生産は間違いないが、福岡県飯倉D遺跡でも内行花文系Ⅱ型B類bの鋳型が出土しており、上述の井尻B遺跡においても内行花文系Ⅱ型B類aと内行花文系Ⅳ型A類の折衷系のような鋳型が出土している。また内行花文系Ⅳ型A類の鋳型が福岡県ヒルハタ遺跡で出土している。このためⅡ型B類やⅣ型A類の製作地としては須玖遺跡群以外にも複数の製作地を考えておかなければならない。内行花文系Ⅲ型についてはC類の鋳型が福岡県須玖永田遺跡で出土しており、画一的な文様構成からほとんどの製品が須玖遺跡群で製作されたものと考えておきたい。

2.3. 漢鏡編年の再検討

前節で小形仿製鏡の分類と編年をおこなった。次に漢鏡編年の再検討をおこなう。本論では漢鏡と小形仿製鏡の流通がどのように関連するのかを問題としているため、次節で述べる併行関係とは漢鏡の流入時期と小形仿製鏡の製作時期ということとなる。漢鏡の流入時期については岡村によって中国における製作時期がほぼストレートに適用されてきた。これに異を唱えたのが寺沢であり（寺沢2004）、寺沢の指摘のうち重要な点は漢鏡3期後半～4期鏡群の北部九州への流入時期であろう。漢鏡の流入は北部九州における小形仿製鏡の製作開始時期や型式変化と密接に関わる問題である。異体字銘帯鏡についてはⅢ式～Ⅵ式において退化型式（Ⅲ'式～Ⅵ'式）が存在することが示されている。これらは北部九州や中国での出土例によって検証されており、それぞれの典型型式よりも時期の下る資料であるとされている。この点を念頭に置き岡村編年を再考したのが表3である。

2.4. 漢鏡と小形仿製鏡の併行関係

ここで漢鏡の流入時期と小形仿製鏡の製作時期の併行関係について検討をおこなう。

朝鮮半島製である内行花文系Ⅰ型B類と重圈文系Ⅰ型B類については上述のような異体字銘帯鏡Ⅲ式や虺龍文鏡ⅡA式との共伴から漢鏡3期の時期に製作されたものと考えられる。また北部九州製である内行花文系Ⅰ型A類と重圈文系Ⅰ型A類については異体字銘帯鏡Ⅲ式やⅣ式の模倣であろうが、後述する異体字銘帯鏡Ⅲ式を中心とした漢鏡3期の限定的な分布や前漢鏡に付されたであろう権威の象徴性（高倉1993）から考えると、漢鏡3期鏡群が存在している間に小形仿製鏡が製作されたと考えるにはやや難がある。そこで内行花文系Ⅰ型A類と共通する特徴をもつ内行花文系Ⅱ型A類と漢鏡の関係から考えてみたい。

表3 漢鏡の編年

	漢鏡3期	漢鏡4期	漢鏡5期	漢鏡6期
異体字銘帯鏡	I II III IV	V VI		
異体字銘帯鏡（退化型式）		III' IV' VI'	V'	
方格規矩四神鏡		I II III IV	VA VB VC	VI VII
細線式獸帯鏡		I II III	IVA IVB IVC	V VI
虺龍文鏡		I II A	II B	
四葉座内行花文鏡			I II III IV	VA VB
円座内行花文鏡			I II	III
蝙蝠座内行花文鏡				I II
浮彫式獸帯鏡			I II	

（岡村1984・1993b、寺沢2004を参考に作成）

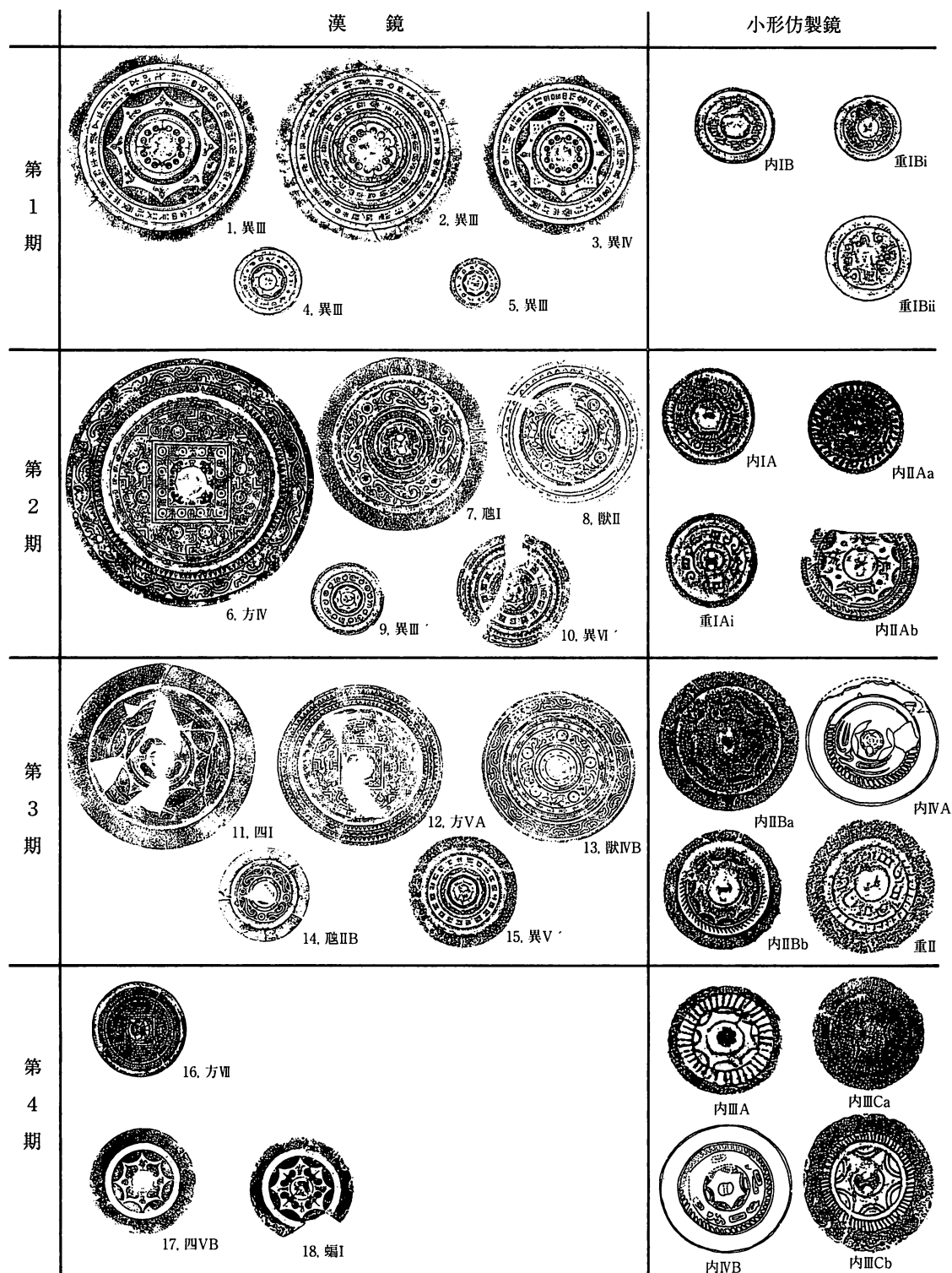


図 6 漢鏡と小形仿製鏡の併行関係

内行花文系Ⅱ型A類については漢鏡との共伴例がなく併行関係を捉えるのが困難ではあるが、銘帯に文字だけではなく獣形の文様がみられることはその製作が動物文鏡群である方格規矩四神鏡や細線式獣帯鏡の流入後であったとみてよいだろう。このことから内行花文系Ⅰ型A類とⅡ型A類の製作時期を異体字銘帯鏡Ⅲ式～動物文鏡群の流入時期、つまり漢鏡4期の流入した時期においておきたい。内行花文系Ⅱ型B類や内行花文系Ⅳ型・重圈文系Ⅱ型の製作については幅広化した縁から異体字銘帯鏡Ⅴ式や素文縁方格規矩四神鏡（漢鏡4期～5期）の流入後であったと考えられる。また韓国済州道健入道山地港（内行花文系Ⅱ型B類）における貨泉との共伴例からも王莽鏡流入後の製作であったと思われる。内行花文系Ⅲ型については漢鏡6期との共伴例がみられる（良洞里162号墓）ことから製作・流通時期をこのあたりに置いてよいと思われる。

以上のように漢鏡と小形仿製鏡の併行関係の私案を示したが、小形仿製鏡の製作はそのモデルとなる漢鏡の流入に起因していると考えられることから、漢鏡の流入との関係によって漢鏡2～3期の流入と朝鮮半島南部における小形仿製鏡の製作開始を第1期、漢鏡4期の流入と北部九州での小形仿製鏡製作開始を第2期、漢鏡5期の流入と縁の幅広化した内行花文系Ⅱ型B類・Ⅳ型・重圈文系Ⅱ型の製作を第3期、漢鏡6期の流入と内行花文帯の表出方法の変化を第4期とする。この画期は小形仿製鏡生産の画期にも整合している。以上のことをまとめると図6のようになる。

3. 銅鏡の流通状況

3.1. 漢鏡の流通状況⁽⁷⁾

前章において漢鏡と小形仿製鏡の併行関係を示した。本章ではそれぞれの分布状況の時期的変遷をみていこう。

まずは漢鏡の分布の様相をみていく。第1期（図7左）は玄界灘沿岸から脊振山脈南麓において集中的な分布がみられ、福岡県三雲南小路1・2号甕棺や福岡県須玖岡本D地点墓といった大量の漢鏡を副葬する墓が存在する。一方、他地域においては現在までのところ出土例が乏しい。異体字銘帯鏡Ⅲ式を中心とする第1期の漢鏡はすべて副葬品として扱われている⁽⁸⁾。

第2期（図8左）は前段階に異体字銘帯鏡の分布のみられた地域に引き続き分布がみられる。他地域においても出土例が見られるようになり、熊本平野や壱岐、対馬にも分布域が広がっている。注目すべきは第1期にみられた大量の漢鏡を副葬する墓がみられなくなり、佐賀平野における出土が増大することである。佐賀平野においてはほとんどが墓への副葬品として用いられており、当地域が玄界灘沿岸地域よりも遅れて銅鏡を副葬するようになったことによるものと思われる。また東九州においていち早く破鏡が出現しており、第2期において鏡保有者層の拡大が生じたものと考えられる。

第3期（図9左）には分布が一段と拡大し、福岡県井原鏡溝遺跡において第1期にみられた大量副葬墓が出現する。また佐賀平野における分布の集中も著しい。第3期の佐賀平野には異体字銘帯鏡Ⅴ式が集中しており、これは小形仿製鏡の生産にも影響を与えている。また中九州において破鏡が多量に出土しており、九州内においても異質な銅鏡使用がこの時期に一般化した状況を示している。菊地川流域以南においてもようやく漢鏡が流入するようになる。第3期における漢鏡分布の拡大は第2期における鏡保有者層の拡大と使用方法の多様化がいつそう進んだものと考えられる。

第4期（図10左）にはこれまでの分布に大きな変化がみられる。最も大きな変化としてこれまで佐賀平野東部地域にみられた漢鏡の集中がみられなくなる。完形鏡の出土もほとんどなく、破鏡を使用



図7 第1期の分布 (左:漢鏡、右:小形仿製鏡)



図8 第2期の分布 (左:漢鏡、右:小形仿製鏡)

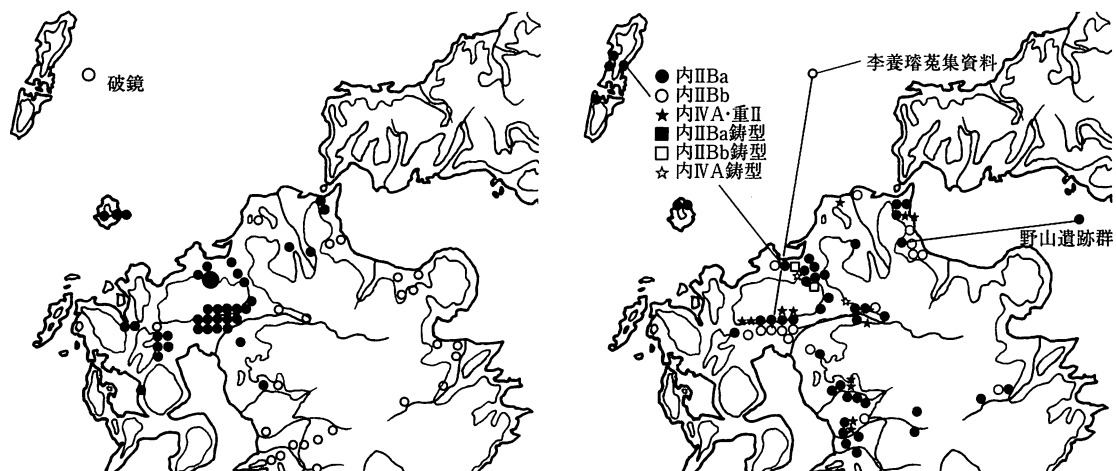


図9 第3期の分布 (左:漢鏡、右:小形仿製鏡)

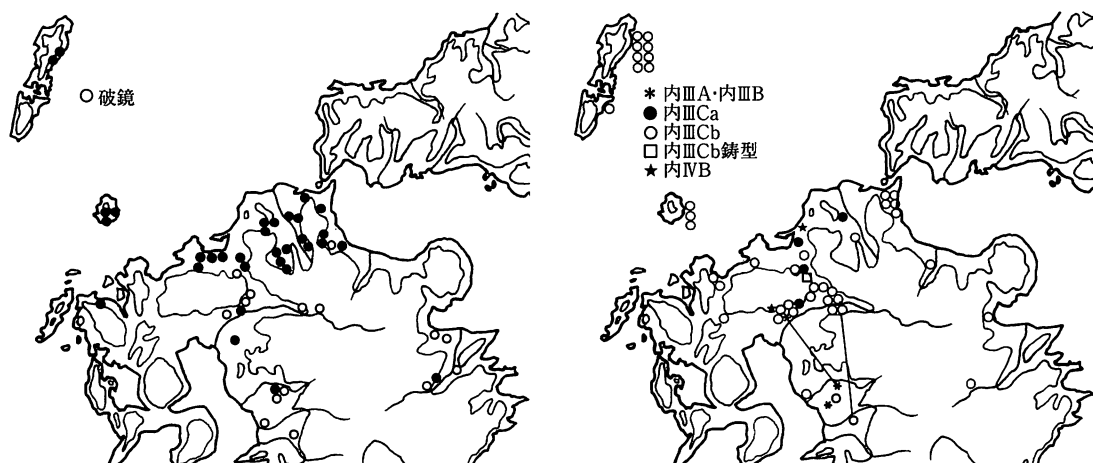


図10 第4期の分布（左：漢鏡、右：小形仿製鏡）

するようになる。またこれまで銅鏡流通を担っていた福岡平野や糸島地域においても漢鏡がまとまって出土するということではなく、逆に遠賀川流域や北九州から行橋においての分布が顕著となっている。第4期においてそれまでの安定していた流通形態に変化が起こったものと考えられる。

3.2. 小形仿製鏡の流通状況

次に小形仿製鏡の分布の変遷をみていく。第1期（図7右）⁽⁹⁾は朝鮮半島において小形仿製鏡が生産された時期である。朝鮮半島製小形仿製鏡は点的な分布を示すが、おそらく福岡平野または糸島地域への流入後、各地に流通していたものと思われる。第1期の分布は異体字銘帯鏡の副葬がみられた地域とそれ以外の遠隔地に分離することができる。異体字銘帯鏡を副葬した地域においては入手後すぐに副葬され、その他の地域においては後期後半～終末まで廃棄されない。第1期においては朝鮮半島南部と異体字銘帯鏡を副葬した地域と遠隔地の両方に同範鏡が認められる（表4）⁽¹⁰⁾。

第2期（図8右）の小形仿製鏡は分布域が大きく拡大する。第2期を北部九州での生産開始期のⅠ型A類と、その後の製作であるⅡ型A類にわけて分布をみてみよう。Ⅰ型A類段階は漢鏡2～3期に異体字銘帯鏡を大量に副葬していた地域ではみられず、その他の地域、特に菊地川流域以南に集中して分布している。菊地川流域以南においては第1期にすでに朝鮮半島製の小形仿製鏡がみられた地域であり、これ以後小形仿製鏡が集中する地域でもある。また菊池川流域と同様に第3期に分布において分布が広がる豊前地域との同範関係もみられる。Ⅱ型A類段階には出土数も増え、点的ではあるが北部九州一円に小形仿製鏡が広がっている。ここで注目すべきは文様構成の相違によって細分したもの分布状況である。異体字銘帯鏡や朝鮮半島製小形仿製鏡の副葬がみられた地域ではa類とb類が混在しているが、菊地川流域においてはb類しか出土していない。第2期における同範関係について特筆すべきは北部九州に同範鏡が認められず、菊地川流域にその中心があるという点である。しかも同範関係は九州内に留まらず、内行花文系Ⅰ型A類は多量の鉄製品を副葬した舍羅里遺跡130号墓出土鏡と菊池川中流域の小野崎遺跡、内行花文系Ⅱ型A類は慶州博物館蔵李養璿菴集資料と菊池川中流域の方保田東原遺跡・うてな遺跡の間にみられる。またⅡ型A類の同範鏡は福岡県大庭・久保遺跡と佐賀県牟田寄遺跡の間にもみられ、第1期に異体字銘帯鏡を副葬した地域にもみられる。

第3期（図9右）には分布域が北部九州全域に拡大し、出土数も大幅に増加する。この状況は漢鏡

表 4 小形仿製鏡の同範関係

No	型式	同範関係		
1	内ⅠA	五丁中原遺跡4区5号住居址 (熊本県熊本市)	続命院遺跡 (福岡県犀川町)	
2	重ⅠAi	舎羅里130号墓 (韓国慶尚北道)	舎羅里130号墓 (韓国慶尚北道)	
3	重ⅠAiii	小野崎遺跡堀の内Ⅰ区ピット (熊本県菊池市)	舎羅里130号墓 (韓国慶尚北道)	
4	重ⅠBii	漁隠洞遺跡 (韓国慶尚北道)	坪里洞遺跡 (韓国慶尚南道)	二塚山遺跡46号甕棺墓 (佐賀県吉野ヶ里町)
5	重ⅠBii	漁隠洞遺跡 (韓国慶尚北道)	石井入口遺跡82号住居跡 (大分県竹田市)	
6	内ⅡAb	うてな遺跡城の上Ⅱ区57号住居跡 (熊本県菊池市)	方保田東原遺跡119番地仮7号住居 (熊本県山鹿市)	李養璿蒐集資料
7	内ⅡAb	大庭・久保遺跡29号木棺墓 (福岡県朝倉市)	牟田寄遺跡SB15160掘立柱建物 (佐賀県佐賀市)	
8	内ⅡBb	平塚川添遺跡 (福岡県甘木市)	白壁白石 (佐賀県みやき町)	
9	内ⅡBa	弥永原遺跡2号住居跡 (福岡県福岡市)	タカマツノダン遺跡 (長崎県対馬市)	(方保田東原遺跡土器溜め) (熊本県山鹿市)
10	内ⅡBb	礫石B遺跡SJ14甕棺墓 (佐賀県佐賀市)	李養璿蒐集資料	
11	内ⅡBa	宮原遺跡1号石棺 (福岡県張香春町)	野山遺跡群池殿奥支群4号墳東棺 (奈良県宇陀市)	
12	内ⅢB	吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区 SD0265溝跡(佐賀県吉野ヶ里町)	小野崎遺跡堀の内Ⅰ区SK-68 (熊本県菊池市)	
13	内ⅢCb	後山遺跡2号石棺 (福岡県甘木市)	西弥護免遺跡 (熊本県大津町)	

の状況と同様である。佐賀平野全域と菊地川流域以南において分布がさらに密となり、この段階は唯一福岡平野周辺において小形仿製鏡が集中する。第3期はさまざまな種類の小形仿製鏡が製作された時期であるが、内行花文系Ⅱ型B類についてみると、分布の集中する地域における構成は第2期と同じような状況が見られる。佐賀平野や北九州地域においてはa類とb類が混在しているが、菊地川流域以南では1点を除いてa類しか出土していない。壱岐や対馬においても現在のところa類のみの出土であり、製作の中心をなしていたであろう福岡平野周辺でもa類が集中している。また鑄型の出土や分布域から非須玖遺跡群製と考えられている内行花文系Ⅳ型と重圈文系Ⅱ型(田尻2004)は佐賀平野を中心に広く北部九州一円に分布しており、分布の集中する地域には必ずと言ってよいほど出土している。同範関係は礫石B遺跡と福岡県平塚川添遺跡、長崎県タカマツノダン遺跡と福岡県弥永原遺跡(方保田東原遺跡出土鏡も同工房での製作であろう)、福岡県宮原遺跡と奈良県野山遺跡群池殿奥支群にみられ、第1期に異体字銘帯鏡を副葬した地域と第2期に同範鏡を有した地域に集中している。

第4期(図10右)は小形仿製鏡生産の最終段階である。Ⅲ型A・B類段階の状況は出土数が少ないため現時点ではよくわからないが、Ⅲ型C類段階においてはこれまでの状況が一変する。Ⅲ型C類も文様構成によりa類とb類に分けられることは分類の際に述べたが、その分布をみるとほとんどがb類であることがわかる。この変化は集約した生産体制による文様構成の画一化によるものであろうが、この変化は劇的である。しかもこれまで小形仿製鏡の流通において他地域よりも優位にたっていた佐賀平野と菊地川流域の出土数が激減している。これに対し対馬には多数の小形仿製鏡が分布している。また同範関係は、菊池川流域以南においてそれまで継続的に小形仿製鏡を入手していた菊池川中流域とは異なる地域にみられ、Ⅲ型C類は菊池川中流域に分布しない。このことから第4期はこれまでの生産体制と流通形態が大きく変換した時期であるといえる。

4. 弥生時代九州における銅鏡の流通

4.1. 漢鏡の流通と北部九州における小形仿製鏡生産開始の実態

ここで漢鏡と小形仿製鏡の流通状況から小形仿製鏡生産がどのような要因によって開始されたのかを第1期から第2期におけるそれぞれの分布の変遷から明らかにしたい。まず小形仿製鏡の原鏡となった第1期の漢鏡2～3期は極めて限定された分布を示しており、これは異体字銘帯鏡の副葬にみられる権威の象徴性（高倉1993）の所以であることは明らかであろう。ここで注目すべきはこれらの地域では朝鮮半島製小形仿製鏡のみがみられ、異体字銘帯鏡とともに副葬品として用いられている点である。このことから朝鮮半島製小形仿製鏡が異体字銘帯鏡と同様な価値を有していたものと考えられる。一方、第2期に製作された北部九州製小形仿製鏡は第1期に異体字銘帯鏡が副葬された地域ではなく周辺地域である菊池川流域や豊前地域で出土している。菊池川流域においては第1期に朝鮮半島製小形仿製鏡を入手していたが漢鏡の分布はみられなかった。第2期の漢鏡の分布は第1期に引き続き未だ限定的なもので、菊池川流域以南と異体字銘帯鏡の副葬以来漢鏡流通の中心である福岡平野や佐賀平野を比べるとその差は歴然としている。ここに北部九州における小形仿製鏡製作開始の要因が垣間見られる。この時期の漢鏡は異体字銘帯鏡の流通した範囲にしか分布しておらず漢鏡の流通は依然限定的なもので、恐らくそれは流通主体であった集団による流通規制が存在したものと考えられる。そこでそれ以外の地域へ銅鏡を与えるために小形仿製鏡生産が開始されたのではないだろうか。これは漢鏡の絶対数の不足や周辺域からの要求によるものではなく、あくまで漢鏡の流通主体の側による動きであったと考えられる。しかも第2期に同範関係のあった菊池川流域以南と豊前地域では第3期において小形仿製鏡の分布が集中する地域でもある。つまり小形仿製鏡はそれまで銅鏡を保有していなかった集団に対して銅鏡を与えるために創出されたものであり、以後その地域は銅鏡を継続的に入手する地域へとになっていくのである。

4.2. 漢鏡の流通と小形仿製鏡の生産・流通

前節では漢鏡の流入から北部九州での小形仿製鏡生産に至る過程についてみてきた。次に第2期から第4期における漢鏡と小形仿製鏡の関係をみていきたい。

漢鏡は第1期と同様に限定的な分布を示す第2期を経て、第3期において極めて大きく変化する。第3期には分布域が拡大するだけでなく、東九州において破鏡の使用が一般化し、明らかに前段階よりも銅鏡を所有する集団が増加していることがわかる。このような漢鏡の状況に対し、小形仿製鏡は第2期において文様構成を異にする製作者集団の分岐がみられ、第3期において製作地の分散を迎える。小形仿製鏡は筑後川流域よりも南側に内行花文系Ⅱ型B類aの分布が顕著となり、北部九州の状況とは異なっている。これは佐賀平野や九州東北部において内行花文系Ⅱ型B類が文様構成に関係なく分布しているのとは対照的である。田尻はこの時期の小形仿製鏡の生産体制は分散した生産体制であり、流通も各製作地から直接おこなわれていたものとした。しかし内行花文系Ⅱ型B類にみられるように銅鏡の分布が希薄な地域では一定のまとまりがみられ、遠隔地へ対しては流通が管理されていたと思われる。また同範関係をみると北部九州製小形仿製鏡の同範鏡が存在する地域は佐賀平野、朝倉平野、豊前地域、菊池川流域以南、対馬、朝鮮半島南部である。中でも佐賀平野と朝倉平野は第1期において異体字銘帯鏡を副葬していた地域であり、豊前地域と菊池川流域以南は第2期に他地域に先駆けて小形仿製鏡が流通した地域である。このような状況から小形仿製鏡の流通は計画的におこなわれていた可能性も想起されるのである。

第4期には上述のように小形仿製鏡の流通がこれまでの状況と大きく変わる。これは漢鏡の流通においても言えることで、佐賀平野においてはこれまで漢鏡の流通や小形仿製鏡製作の中心地であった福岡平野を凌ぐ数の漢鏡を保有してきたが、第4期にはその量が急激に減少する。第4期において漢鏡の出土量が増加するのが第2期の立岩遺跡以来銅鏡の分布が希薄であった筑豊地域である。しかし小形仿製鏡はほとんど出土しておらず、佐賀平野の状況とはまったく異なっている。小形仿製鏡の生産体制・流通形態の劇的な変化と漢鏡の分配先の変更は互いに影響を与え合っていたものと考えられる。両者の分布を比較すると地域によって漢鏡の分布が卓越する地域と小形仿製鏡が卓説する地域が明確にわかれるようにもみえる。第4期においては流通主体からの意図的な分配がおこなわれていたことも想定しておきたい。

5. まとめ

以上、漢鏡の流入と小形仿製鏡の流通の時期ごとの変遷から漢鏡の流入が小形仿製鏡の生産と流通にどのような影響を与えたのかを検討してきた。小形仿製鏡生産においては漢鏡の流入が強く影響を与え、北部九州での製作開始の背景には初期の段階にみられる状況から周辺域へ配布するための器物、つまり異体字銘帯鏡を模倣した銅鏡の必要性があったものと想定した。これは漢鏡の不足や鏡保有者層の拡大に起因するものではなく、あくまで流通を管理していた側に製作開始の要因があったと考えられる。しかしこの点を具体的に述べるためには、各地域内における漢鏡・小形仿製鏡の扱われ方の検討が必要である。また第3・4期における漢鏡と小形仿製鏡にどのような社会的意義の差異が存在したのかという銅鏡流通の本質的な問題についても、各地域における集落の動向や墓域における銅鏡副葬墓と非副葬墓との関係の分析を通じて明らかにしていきたい。今後の課題としておきたい。

注

- 1) 本稿では穿孔や破面研磨が施されているものを破鏡として扱う。
- 2) 内行花文帯の欠落により重圏文系小形仿製鏡が成立した可能性は小田富士雄によって述べられたものである(小田1982)。筆者は内行花文系小形仿製鏡と重圏文系小形仿製鏡に前後関係がみられないことや内行花文帯の欠落する具体的な要因が考えられないため小形仿製鏡の原鏡として内行花文日光鏡と重圏文日光鏡が存在したことを想定している。
- 3) 漢鏡の分類については岡村の分類を用いる(岡村1984・1990・1993b)。異体字銘帯鏡Ⅲ式は福岡県立岩遺跡や福岡県三雲南小路遺跡2号甕棺墓などで出土している、所謂内行花文清白鏡・昭明鏡・日光鏡や重圏文清白鏡・昭明鏡・日光鏡を指す。
- 4) Ⅱ型は文様帯の単位文様による細分も可能である。田尻は単位文様の細分によって鏡群を抽出し、鏡群ごとに分布に偏りがみられるとする。しかし佐賀平野や菊池川流域では各鏡群が満遍なく出土している。筆者は単位文様が文様構成の違いを越えて用いられていることから、製作者集団間におけるモデルの共有が存在したものと考えている。つまり文様構成の違いは、製作者集団の違いではなく製作者集団内における系統の違いによるものであると考える。なお、文様構成の細分については以前「A群」、「B群」としたが(南2002)、本論では分類の際に文様構成に着目していることから「a類」、「b類」とする。
- 5) 小形仿製鏡の製作技術と製作地に関しては別稿で詳細に論じる。
- 6) 重圏文系Ⅰ型A類iiiの鋳型が福岡県寺徳遺跡で出土しているが、田尻もいうように(田尻2004: p.

- 54) 寺徳遺跡周辺ではこの他に鋳型や鋳造関連遺物が出土していないため、青銅器生産の可能性は極めて低い。
- 7) 本稿では漢鏡の流入と小形仿製鏡生産の関係を明らかにすることを目的としているため福岡県平原遺跡出土鏡については触れていない。平原遺跡出土鏡の評価については舶載鏡であるか仿製鏡であるかの判断を含めて今後の課題としておきたい。
- 8) 熊本県方保田東原遺跡・同新御堂遺跡において異体字銘帯鏡Ⅲ式と考えられる縁のみの破片が出土している。方保田東原遺跡は副葬品であるが新御堂遺跡は竪穴住居からの出土である。周辺地域における銅鏡の扱われ方は今後検討する必要がある。
- 9) 結線は同範関係を示す。
- 10) 筆者実見のうえ同範鏡であると判断した。

引用・参考文献

- 岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第55号 史学研究会：pp. 1-42
- 1990「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』木耳社：pp. 3-26
- 1993 a「楽浪漢墓出土の鏡」『弥生人の見た楽浪文化』大阪府立弥生文化博物館：pp. 58-62
- 1993 b「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第55集 国立歴史民俗博物館：pp. 39-82
- 1995「楽浪出土鏡の諸問題」『考古学ジャーナル』No. 392 ニューサイエンス社：pp. 15-20
- 小田富士雄 1982「日・韓地域出土の同範小銅鏡」『古文化談叢』第9集 九州古文化研究会：pp. 87-104
- 七田忠昭 1979「土壙墓の年代」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員：pp. 310-311
- 高倉洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第3号 日本考古学会：pp. 1-30
- 1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2 九州歴史資料館：pp. 1-23
- 1985「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻第3号 日本考古学会：pp. 94-121
- 1993 a「弥生時代仿製鏡の製作地」『季刊考古学』第43号 雄山閣：pp. 59-63
- 1993 b「前漢鏡にあらわれた権威の象徴性」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第55集 国立歴史民俗博物館：pp. 3-37
- 田崎博之 1984「北部九州における弥生時代終末前後の鏡について」『史淵』第121輯 九州大学文学部：pp. 181-218
- 田尻義了 2003「弥生時代小形仿製鏡の製作地—初期小形仿製鏡の検討—」『青丘学術論集』第22集 財団法人韓国文化研究振興財団：pp. 75-95
- 2004「弥生時代小形仿製鏡の生産体制論」『日本考古学』第18号 日本考古学協会：pp. 53-71
- 辻田淳一郎 2005「破鏡の伝世と副葬—穿孔事例の観察から—」『史淵』第142輯 九州大学大学院人文科学研究院：pp. 1-39
- 寺沢 薫 2004「考古資料から見た弥生時代の暦年代」『考古資料大観』第10巻 小学館：pp. 332-364
- 橋口達也 2003「炭素14年代測定法による弥生時代の年代論に関連して」『日本考古学』第16号 日本考古学会：pp. 27-44
- 藤丸詔八郎 1993「破鏡の出現に関する一考察—北部九州を中心に—」『古文化談叢』第30集 九州古文化研究会：pp. 87-116

- 2000「後漢鏡について」『古墳発生期前後の社会像』九州古文化研究会：pp. 170-190
- 2003「弥生時代の小形仿製鏡に関する一考察—内行花文日光鏡系Ⅰ・Ⅱ型鏡について—」『初期古墳と大和の考古学』学生社：pp. 110-120
- 細川金也 1997「松ノ内A遺跡の概要および出土状況」『平成6・7年度東脊振村文化財調査報告書』東脊振村文化財調査報告書第21集 東脊振村教育委員会：p. 29
- 南健太郎 2002「2. 青銅鏡」『石川遺跡』植木町文化財調査報告書第14集 植木町教育委員会：pp. 214-221
- 2005「弥生時代小形仿製鏡の鈕および鈕孔製作技法—その技術と系譜に関する予察—」『鏡の研究』Ⅲ 奈良県立橿原考古学研究所・二上古代鑄金研究会：pp. 16-26
- 宮井善朗 1997「鑄型について」『井尻B遺跡5』福岡市埋蔵文化財報告書第529集 福岡市教育委員会：pp. 39-40

図版出典

- 図2 田島遺跡：堀川義英編 1980『柏崎遺跡群』佐賀県文化財調査報告書第53集 佐賀県教育委員会／立岩遺跡34号甕棺：岡崎敬 1977「鏡とその年代」『立岩遺蹟』立岩遺蹟調査委員会／五丁中原遺跡：金田一精編 1997『五丁中原遺跡』五丁中原遺跡群第1次調査区発掘調査概要報告書 熊本市教育委員会／漁隠洞遺跡：小田富士雄 1982「日・韓地域出土の同範小銅鏡」『古文化談叢』第9集 九州古文化研究会
- 図3 立岩遺跡39号甕棺：岡崎敬 1977「鏡とその年代」『立岩遺蹟』立岩遺蹟調査委員会／朝陽洞遺跡38号木棺墓：チョン・ソンエ他編 2003『慶州朝陽洞遺蹟Ⅱ』国立慶州博物館学術調査報告第13冊 国立慶州博物館／真亀C遺跡：中田昭編 1977「真亀C地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会／坪里洞遺跡：小田富士雄 1982「日・韓地域出土の同範小銅鏡」『古文化談叢』第9集 九州古文化研究会
- 図4 三雲南小路2号甕棺：柳田康雄編 1985『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集 福岡県教育委員会／五丁中原遺跡：金田一精編 1997『五丁中原遺跡』五丁中原遺跡群第1次調査区発掘調査概要報告書 熊本市教育委員会／佐々木隆彦編 1995『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告36』福岡県教育委員会／小田富士雄・韓炳三編 1991『日韓交渉の考古学 弥生時代篇』六興出版
- 図5 漁隠洞遺跡：小田富士雄 1982「日・韓地域出土の同範小銅鏡」『古文化談叢』第9集 九州古文化研究会／五丁中原遺跡：金田一精編 1997『五丁中原遺跡』五丁中原遺跡群第1次調査区発掘調査概要報告書 熊本市教育委員会／良洞里427号墓：林孝澤編 2000『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書7 東義大学校博物館／大庭・久保遺跡：佐々木隆彦編 1995『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告36』福岡県教育委員会／鹿道原遺跡：栗田勝弘・清水宗昭編 2001『鹿道原遺跡』千歳村文化財調査報告第Ⅶ集 千歳村教育委員会／飯氏馬場遺跡：柳田康雄編 1971『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会／長野フンデ遺跡：宇野愼敏編 2003『長野フンデ遺跡3』北九州市埋蔵文化財調査報告書第301集 北九州市芸術文化振興財団／良洞里遺跡162号墓：林孝澤編 2000『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書7 東義大学校博物館／汐井掛遺跡：池辺元明編 1980『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告第2集』福岡県教育委員会／後山遺跡：柳田康雄編 1984『甘木市史資料 考古編』福岡県甘木市／三代貝塚：西田大輔編 1994「和臼・三代地区遺跡群 第3分冊」『新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 新宮町教育委員会／吉野ヶ里遺跡：七田忠昭編 2003『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第

156集 佐賀県教育委員会／坪里洞遺跡：小田富士雄 1982「日・韓地域出土の同範小銅鏡」『古文化談叢』第9集 九州古文化研究会／漁隠洞遺跡：小田富士雄 1982「日・韓地域出土の同範小銅鏡」『古文化談叢』第9集 九州古文化研究会／真亀C遺跡：中田昭 1977「真亀C地点遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 広島県教育委員会／（伝）菊池・阿蘇：野田拓治 1983「12重圈文鏡」『肥後考古』第3号 肥後考古学会／舍羅里遺跡：河眞鍋・金美淑編 2001「慶州舍羅里遺跡Ⅱ—木棺墓、住居址—」『嶺南文化財研究院学術調査報告書』第32冊 嶺南文化財研究院／五本谷遺跡：石隈喜佐雄・七田忠昭編 1979『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会

図6 漢鏡（左上から） 1～3、立岩遺跡10号甕棺：岡崎敬 1977「鏡とその年代」『立岩遺蹟』立岩遺蹟調査委員会／4、三雲南小路2号甕棺：柳田康雄編 1985「三雲遺跡 南小路地区編」福岡県文化財調査報告書第69集 福岡県教育委員会／5、立岩遺跡34号甕棺：岡崎敬 1977「鏡とその年代」『立岩遺蹟』立岩遺蹟調査委員会／6、桜馬場遺跡：杉原莊介・原口正三 1961「佐賀県桜馬場遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会／7、平原遺跡：柳田康雄他編 2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集 前原市教育委員会／8、二塚山遺跡：石隈喜佐雄・七田忠昭編 1979『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会／9、田島遺跡：堀川義英編 1980『柏崎遺跡群』佐賀県文化財調査報告書第53集 佐賀県教育委員会／10、宝満尾遺跡：山崎純男編 1974『宝満尾遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集 福岡市教育委員会／11、坊所一本谷遺跡：細川金也編 1997『平成6・7年度東脊振村文化財調査報告書』東脊振村文化財調査報告書第21集 東脊振村教育委員会／12、松葉遺跡：細川金也編 1997『平成6・7年度東脊振村文化財調査報告書』東脊振村文化財調査報告書第21集 東脊振村教育委員会／13、三津永田遺跡：金関丈夫・坪井清足・金関恕 1961「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会／14、三津永田遺跡：金関丈夫・坪井清足・金関恕 1961「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会／15、柊島山遺跡：志佐惲彦 1977「県内出土の古鏡—弥生・古墳時代— 柊島山遺跡調査報告書」『佐賀県立博物館調査研究書』第3集 佐賀県立博物館／16、良積遺跡：本田岳秋編 1998『良積遺跡Ⅱ』北野町文化財調査報告書第11号 北野町教育委員会／17、原田遺跡：福島日出海編 1987『嘉穂地区遺跡群Ⅳ』嘉穂町文化財調査報告書第7集 嘉穂町教育委員会／18、前田山遺跡：長嶺正秀編 1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集 行橋市教育委員会

Inflow of Han mirror and production of imitative mirror in Kyushu of the Yayoi period

MINAMI Kentaro

A lot of cultures flowed in from China and a Korean peninsula around northern part Kyushu in the age of Yayoi. The bronze mirror is one in this, Northern part of Kyushu has been mainly brought from first Han to post Han. Yayoi period circulates Chinese mirror, divided mirror and imitative mirror. The purpose of this thesis is to catch a time, spatial transition of the bronze mirror and the realities of the metal mirror circulation are clarified. The going side by side relation between Chinese mirror and imitative mirror clarified. And Chinese mirror and imitative mirror distribution situation were compared, and the feature brought together. Result of analysis the first stage Chinese mirror is shown limited distribution and Korean imitative mirror was distributed to the remote place. The second stage, the bronze mirror is produced in northern part Kyushu. The reason for the factor of the production beginning is that a new thing for people who were managing circulation to distribute it to the surrounding is needed. This is thought for the factor of the production beginning to have existed on not the one that originates in the lack of Chinese mirror and the expansion of the mirror holder layer but the side where circulation was managed to the end.